赤ちゃんはどこへ行ってしまったのか
～ シンガポールにおける少子化問題と『トーナメント競争マインドセット～』との関係 ～

シム　チュン・キャット（昭和女子大学）

本発表では、シンガポールで実施した個別面接聴取調査の結果をもとに、小学校から始まる学歴競争がいかに強固な「トーナメント競争マインドセット」を国民の間に浸透させ、そのことが晩婚化、未婚化、そして少子化といった社会問題につながる可能性を示していく。

1. トーナメント移動型教育の問題

天然資源に乏しいシンガポールにおいて、国の経済を発展させるためには人的資源を最大限に引き出すことが重要である。それゆえに、学校教育の面では初等教育段階から児童生徒を学力別にふるい分ける分岐型制度が長年実施されてきた。シンガポールにおけるこのような「トーナメント移動型」教育競争のもとでは、勝ち続けなければ、いずれは淘汰されて競争の土俵から降りるか、あるいは敗者復活戦にまわってこれまで以上に努力をしてカムバックを果たすしかない。学歴格差が賃金格差に直結するシンガポールにおいて、自らの学歴を少しでも高めるべく多くの人が後者の道を進むことは十分に想像できる。そうであるからこそ、教育期間が長引いたりするばかりでなく、学歴をめぐるトーナメント競争が卒業後にも続いていくのである。こういった「トーナメント競争マインドセット」がシンガポールの少子化問題に大いに影響を与えているのではないかと考えられよう。

2. 学歴競争ゆえの未婚晩婚問題

シンガポールの全国青年評議会の調査によれば、結婚をライフゴールの一つとして考える若者が少なく、またキャリアアップのために「トーナメント競争マインドセット」が 30 代を過ぎても衰えないことが明らかになった。加えて、本研究がシンガポールで行った聴取調査で得られた結果からも、未婚者が結婚しない理由として最も多く挙げたのが「仕事・教育活動に没頭」しているからだ、ということが浮き彫りになった。年齢や学歴を問わず、先述した「トーナメント競争マインドセット」が学校教育期間を終えた段階でも人々の意識に深く潜んでいることが垣間見えたのである。

3. 子どもを産まない夫婦の増加問題

公的統計によれば、シンガポールではたとえ結婚しても子どもを産まない「無子夫婦」も増加傾向にある。本研究の調査結果によると、多くの親は子どもの大学進学を期待しており、また子どもが大学を卒業した後でもキャリアを確立するまでサポートしたいと考えている。「トーナメント競争マインドセット」が浸透する社会では、わが子に最良の教育機会を提供し、キャリアも後押ししたいという親心は理解できよう。このことの裏付けとして、「子育てするうえでの経済的負担」という調査の質問事項に対して、「育児費」と「医療費」よりも「大学を含む学校教育費」および「学習塾費」との回答が目立った。

さらに「トーナメント競争マインドセット」の影響によって、自らの経済力以上に多くの子どもを設けることに躊躇してしまう夫婦が増えるのも無理はない。ましてや自分のキャリアアップやワークライフバランスを図るために、時間的、経済的、精神的な負担から子どもを持つことを断念する無子夫婦がいてもおかしくなかろう。

4. 終わりに

シンガポールにおいて、学校教育によって育まれる「トーナメント競争マインドセット」はいわば諸刃の剣であり、国の経済発展に資する一方で、ストレスの元にもなってしまう。そして言うまでもなく、ストレスのない良い環境が整っていなければ、いくらお金による支援があってもコウノトリが飛んでくるはずもない。国の経済成長と少子化抑制の間にどうバランスを見出すか、ここにシンガポールが抱えるジレンマがある。問題解決の出発点として、持続可能な経済発展を維持しながら、学校教育から始まるトーナメント競争を鈍化させれば、少子化改善への扉が開くかもしれない。

（キーワード：少子化問題。学歴競争、トーナメント競争マインドセット）

本研究は JSPS 科研費 JP 18H00936 の研究成果の一部である。